事例報告１

沼津における古代の遺跡様相

小崎　晋
（沼津市教育委員会）

はじめに

今回の文化財講演会のテーマは「川」である。沼津市に流れる川でもっとも代表的なのは狩野川であろう。沼津市域には旧石器時代以降、ほぼ全ての時代で人の活動の痕跡である遺跡が確認されている。なかでも旧石器時代の遺跡で日本列島における最古級の年代を示す井出丸山遺跡や、古墳時代初頭の東日本において最古・最大級といわれる高尾山古墳など注目すべき遺跡が数多く存在する。このような各時代や遺跡を見ていく中で、「川」とのつながりをよく示す時期の一つが奈良・平安時代（以後、古代と表記する）である。特に狩野川下流域から河口部付近で確認されている遺跡の様相は当時の地域の在り様をよく示している。

そこで沼津市域を流れる狩野川流域で確認されている古代の遺跡を見ていくことで、沼津の当該期の遺跡様相と川との関係を見ていきたい。

1　沼津における古代の遺跡立地の概要

沼津市域における古代の遺跡は、浮島ヶ原（浮島沼）を挟むように富士市から東に延びて続く千本砂礫州上、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上、狩野川左岸の香貫山から続く微高地上といった狩野川の両岸、などにその大半が立地する。このような遺跡の分布状況は古くは弥生時代中期から続くものである。また古墳時代後期から終末期にかけて愛鷹山麓には無数の古墳群が築かれており、この古墳群を総称して愛鷹山南麓古墳群とも呼ばれている。これが示す遺跡の立地は当時の人々において主な生業であった水田耕作が可能な場所と近い位置に遺跡が展開していることを意味している。また、海辺に近い位置にも集落が形成されている。

このような中で、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上には、次節で触れるような単なる集落遺跡のみならず、官衙遺跡と想定される上ノ段遺跡や寺院跡である日吉廃寺跡のような特殊な遺跡が存在する。また狩野川左岸の香貫山から続く微高地には大集落である御幸町遺跡が存在することから、狩野川の両岸に当時の沼津市域における政治・経済・文化の中心であったことを示している。

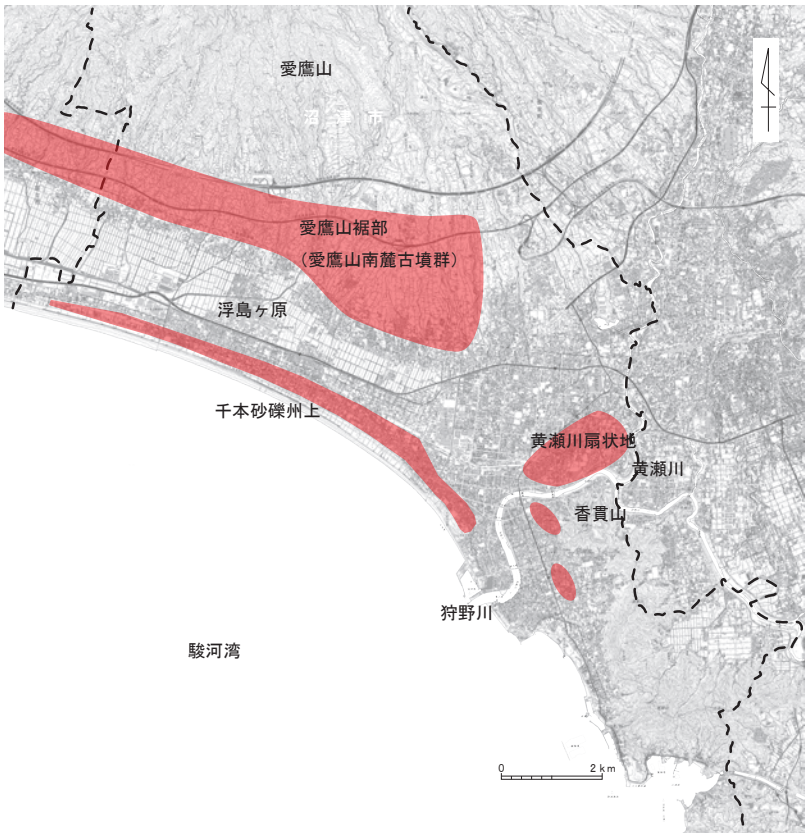


図１　古代を前後する時期の主要な遺跡の分布範囲

2　古代の主要遺跡

ここで、沼津における古代の主要な遺跡をみていきたい。

(1) 集落

中原遺跡　中原遺跡は沼津市一本松地内に所在する弥生時代～古代にかけての遺跡である。平成 20 ～ 22、平成 28 ～令和 3 年度にかけて本調査が実施されており、平成 20 ～ 22 年度にかけて実施した 3 ～ 8 区（面積　計 11,636m2）について平成 27 年度に報告書が刊行されている（沼津市教育委員会 2016）。報告されている各調査区からは計 104 軒の竪穴建物や 17 棟の掘立柱建物跡、東西や南北を走る溝状遺構、そして無数の小穴が確認されている。各調査区からは土師器や須恵器といった土器や鉄鏃や刀子などの金属製品が多数出土している。また、ガラス小玉の鋳型や、分銅・鉸具といった特殊な金属製品が出土しており、単なる農村ないし漁村では考えられない遺物が出土しており、どのような集落であったかは不明な点が多い。

東畑毛遺跡　東畑毛遺跡は沼津市今沢外に所在する遺跡で 6 世紀後半から 9 世紀にかけての集落遺跡である。これまでに 4 次に及ぶ調査が実施されている（沼津市教育委員会 1999・2000）。竪穴建物は 1 ～ 3 次調査で 37 軒、4 次調査で 15 軒の計 52 軒が検出されており、うち古代のものが 30 軒以上である。一方、掘立柱建物跡はすべての調査を含めて数棟に過ぎないことから、集落としての特殊性を見出すことは難しい。ただし、黒笹 14 号窯式（K － 14）や折戸 53 号窯式（0 － 53）といった 9 世紀前半の灰釉陶器とともに、緑釉陶器の小片や墨書土器が出土していることから、当該期において有力農民が居住していた集落の可能性がある。

千本遺跡　千本遺跡は沼津市本字千本地内に所在する 8 世紀後半から 9 世紀にかけて遺跡で、千本砂礫州の東端、狩野川河口部付近に立地している。これまでに 2 次の発掘調査が実施されている。1 次調査で 37 軒、2 次調査で 18 軒と計 55 軒の竪穴建物が密集した状態で検出されている（沼津市教育委員会 2002、2020）。また、土器では墨書土器や線刻土器などとともに、多量の緑釉陶器が出土している。また、和同開珎や神功開寶、隆平永寶といった皇朝十二銭も出土していることから、単なる集落遺跡とは考えにくい遺跡で、公的機関であったかもしれない。千本遺跡は狩野川河口付近に所在することから、明確な遺構は確認されていないものの、港的な役割を有した遺跡であったかもしれない。

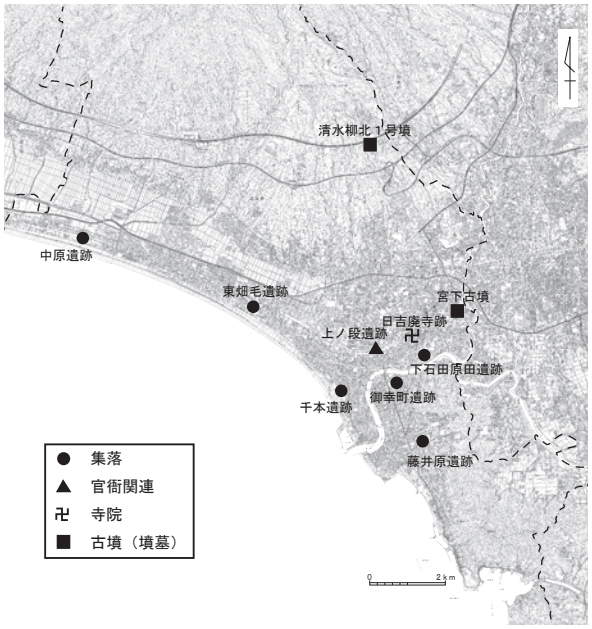


図 2　古代の主要遺跡

下石田原田遺跡　沼津市大岡地内に所在する遺跡で、狩野川右岸で黄瀬川扇状地（御殿場泥流によってできた台地上）に立地している。平成 10・11 年度に発掘調査が実施されており、8 世紀～ 9 世紀前半にかけての住居址 150 軒、掘立柱建物跡 96 棟など多数の遺構が検出されるとともに、土師器・須恵器といった土器や金属製品などの遺物が出土している（沼津市教育委員会 2000）。検出された掘立柱建物跡は調査区全体に分布するが住居址は調査区の西側に集まっており、遺構で分布が異なっている。また出土した土器には墨書が記されたものや線刻が施されたものが出土している。中でも「廷人」と記された線刻土器が存在することは、検出された掘立柱建物跡群が倉庫群である可能性があることも含めて、官衙と推測されている上ノ段遺跡と関連した遺跡である可能性が示唆される。

御幸町遺跡　沼津市御幸町地内に所在する弥生時代中期～古代にかけての遺跡である。これまでに 5 次に及ぶ調査が実施されており（沼津市教育委員会 1979、1980、1981、1998、2017）、検出された住居

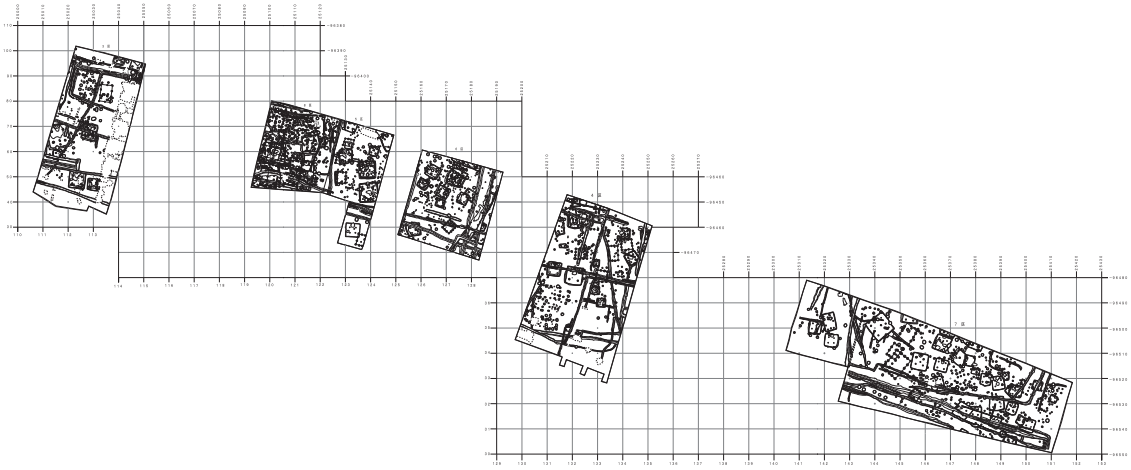


図３　中原遺跡　遺構検出状況図

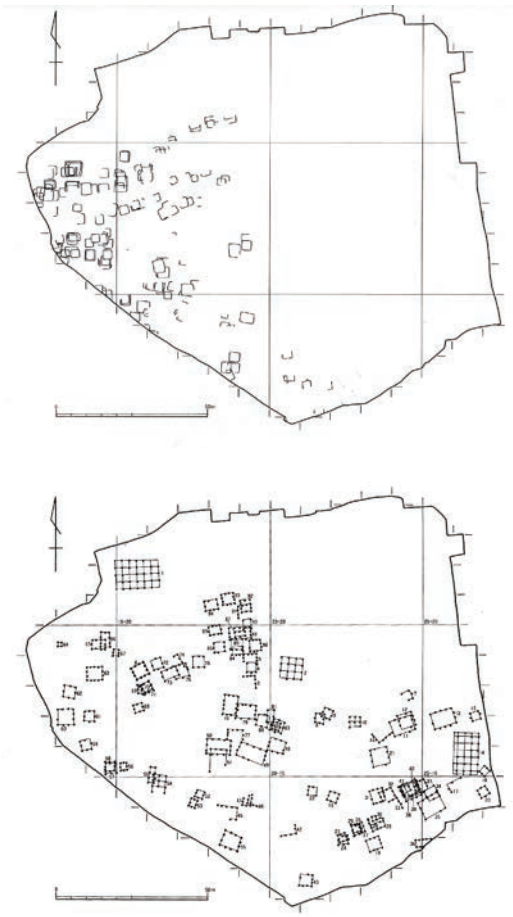


図４　下石田原田遺跡　遺構検出状況図
（上：住居址、下：掘立柱建物）

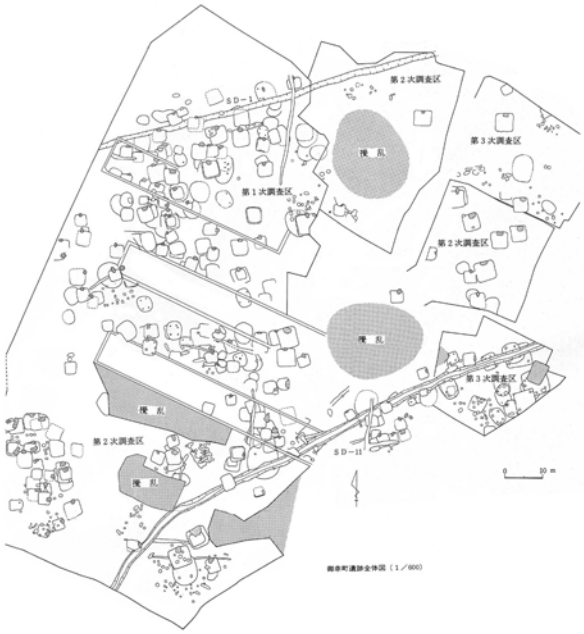


図５　御幸町遺跡　遺構検出状況図

址は総数 400 軒近くに及び、時期比定可能なものは 300 軒近くである。

古代に属するものは約 70％の 230 軒を超える一方で明確な掘立柱建物跡は少ないのが特徴である。遺物では土師器や須恵器といった土器とともに鎌などの日用的な金属製品のほかに銙帯金具などの特殊な金属製品が出土している。また、近年実施された調査では、硯（円面硯）の一部も出土していることから、官人（官衙に関連した役人）が居住していた集落の可能性がある。

藤井原遺跡　沼津市下香貫地内に所在する遺跡で、香貫山から続く微高地に立地している。昭和

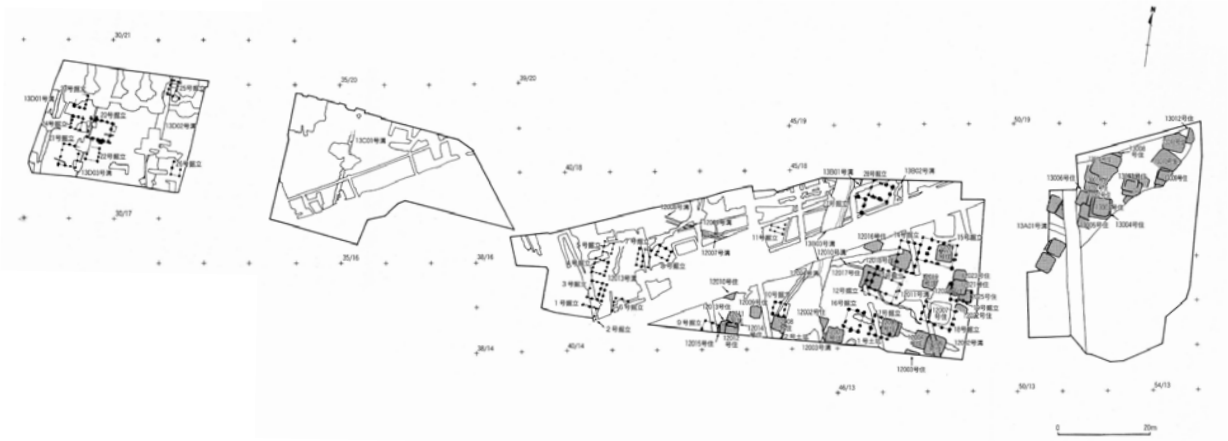


図 6　上ノ段遺跡　遺構検出状況図

49 ～ 52 年度に発掘調査が実施されている（沼津市教育委員会 1975・1976・1977・1978）。検出された遺構は住居址 197 軒、掘立柱建物跡は 11 棟で、うち 8 世紀以降の奈良平安時代に属するものは、住居址 97 軒、掘立柱建物 2 棟である。また、堝形土器が極めて多数出土しており、平城京木簡に見られる駿河・伊豆国から貢進物である堅魚の水産加工品が作られていたと考えられている。

（2）官衙

上ノ段遺跡　沼津市大手町 1 丁目に所在する遺跡であり、キラメッセぬまづ（現プラザヴェルデ箇所）の建設に伴い、平成 9・12・13 年度に調査が実施された。8 ～ 9 世紀にかけての多数の住居址や 40 棟以上の掘立柱建物が検出されており、住居址と掘立柱建物は一部で重複するものの、それぞれの遺構の分布域は分かれている。特に掘立柱建物跡はその大半が規則正しく配置されている様子が伺える。

出土した遺物では須恵器や土師器が多量に出土しているが、それとともに唐三彩陶枕が出土しており、注目される。陶枕は字を記す際の肘置きと考えられ、役人が使用したことが想定され、現在では東海道沿線の県内の主要な都市に所在する遺跡で出土が確認されつつある。また、「倉」と記された緑釉陶器も出土しており、上ノ段遺跡に納税物を管理する施設が設けられた可能性が高く、このことと併せて、検出された掘立柱建物は税として納められたものを収納する倉庫や工房用の管理建物と推定される。これらのことから、上ノ段遺跡は役所機能を有する遺跡である官衙である可能性が高い。

（3）寺院・仏教関連遺跡

日吉廃寺跡　沼津市富士見町に所在する寺院跡であり、7 世紀末ごろに創建された地方豪族による氏寺と考えられている。しかしながら、文献資料等は一切確認されておらず詳細は不明である。日吉廃寺跡における調査は、大正 6 年に丹那トンネル開通に伴う東海道熱海線敷設工事の際に柴田常惠氏らによって塔跡の調査が実施され、また、昭和 30 年代には当遺跡の調査を軽部慈恩氏が精力的に実施し、東西一町（約 108 m）、南北二町（約 216 m）に伽藍が及び、3 時期の変遷が確認される寺院と推定さ

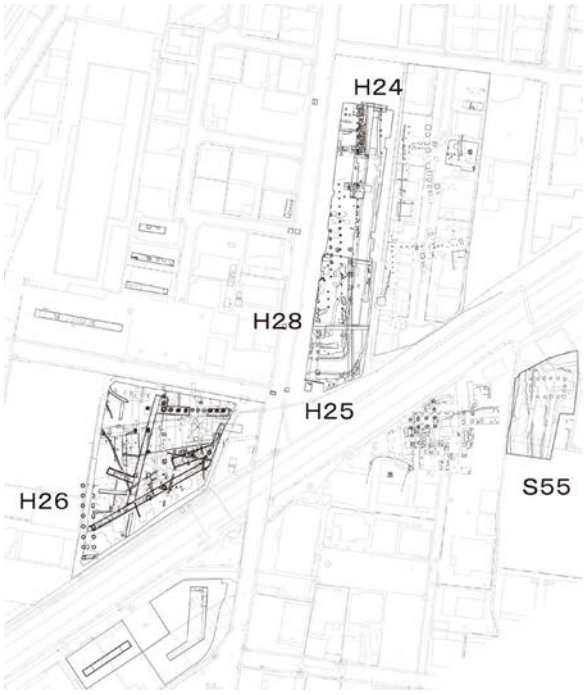


図 7　日吉廃寺跡　遺構検出状況図

れた。平成 25 年度から 28 年度にかけて実施した本調査では、山田寺様式期の大量の瓦とともに、仏像の螺髪や塼仏の一部が出土しており、瓦当様式を踏まえると当該地に県内でも最古級の寺院が存在してことは確実である。しかしながら、近年実施した発掘調査の結果、当該地は大規模な土地の改変を受けており、地山（黄瀬川扇状地堆積物）を掘り込んだ柱穴の列が残っているのみで、基壇等は残っていない可能性が高いことが判明した。また軽部氏が想定した伽藍配置を示すような状況が確認されないことから、日吉廃寺跡の実態については不明な点が多い。

仏教関連遺跡　仏教との関連が想定される遺跡として、いずれも古墳（墳墓）である清水柳北 1 号墳と宮下古墳が上げられる。清水柳北 1 号墳は沼津市足高尾上地内に所在する上円下方墳である。全国的に類例が少ない墳丘形態であるとともに、周溝から火葬骨を入れるための石櫃が出土している。宮下古墳は沼津市大岡地内に所在する遺跡であり、大正期に発掘調査が実施されている。横穴式石室に刳り抜き式の石棺と組合せ式石棺が安置されていた古墳とされている。副葬品に仏具と推測される銅製の水瓶や高台付の鋺などが出土している。

写真 1・2・3　日吉廃寺跡出土遺物（左：軒丸瓦、中：螺髪、右：塼仏）

図 8　清水柳北 1 号墳

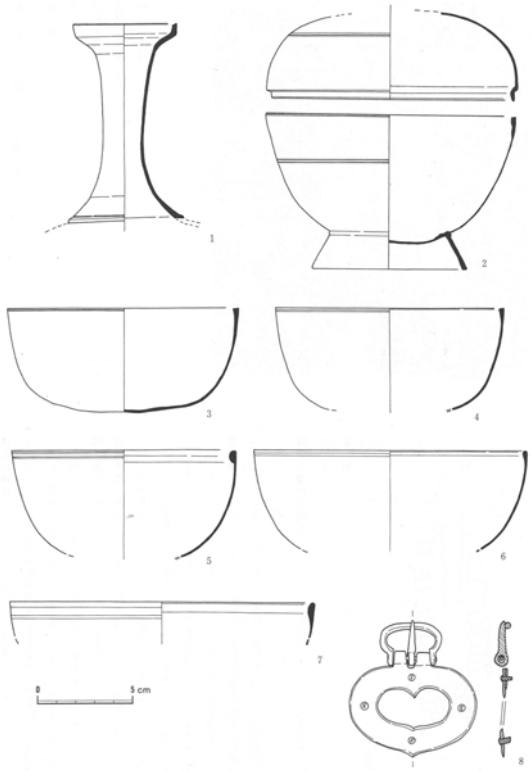


図 9　宮下古墳出土遺物

3　古墳時代～古代にかけての遺跡消長とその意味

前述した遺跡の継続期間を踏まえ、その消長をまとめると図 10 のようになる。6 世紀後半から東畑毛遺跡や御幸町遺跡で遺跡が形成されるものの、現状で確認されている 6 世紀代の遺跡は比較的少ない。

7 世紀になると確認される集落の数がやや増加し、8 世紀に入ると確認される遺跡が劇的に増加する。

官衙と想定される上ノ段遺跡や寺院跡である日吉廃寺跡はまさにこの時期である。この状況は 9 世紀前半まで続くが、9 世紀後半になると遺跡数が減少し、10 世紀に入ると遺跡数はさらに減少する。

このような遺跡の消長が示すことは、古墳時代後期から終末期にかけての遺跡の様相について、愛鷹山麓には愛鷹山南麓古墳群と称される無数の群集墳が、千本砂礫州上には松長古墳群などが、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上には石田古墳群が、狩野川左岸の香貫山から続く微高地上には東本郷古墳群や宮原古墳などが築かれていることから、それぞれの地域において集落が存在しそれに伴った有力者の墓域が形成されていたと考えることができる。

一方で、古代になると、前述した地域にも遺跡が引き続いて形成されているが、沼津市の中心市街地を流れる狩野川の両岸において比較的多数の遺跡が確認されようになる。それらの遺跡の中には官衙遺跡（役所）と考えられる上ノ段遺跡や氏寺（有力者（地方豪族など）によって建立された寺院）である日吉廃寺跡など、当時の政治や文化において重要な遺跡が存在している。

このような状況は古代になると、中央集権による政治体制が確立したことにより、日本各地に役所機能を有した遺跡（官衙）が作られ、そこを中心として遺跡が分布するようになる。当時駿河国の一部であった沼津市域においても全国的な社会変化と同様な展開として、役所機能を持つ遺跡を中心とした遺跡分布が形成されていったと理解できる。

これらの点をふまえ古代の沼津の遺跡立地の特徴を考えると、弥生時代以降引き続いて水田耕作やその他の生業のために市内全域の海沿いを含めたやや微高地に集落遺跡が形成されているものの、政治・経済・文化の中心である官衙や寺院といったいわば特殊な遺跡は狩野川河口部付近に形成されるという、その当時の社会体制を如実に示しているといえる。

そして、このことは規模や内容が違えども、現在の沼津市における街の様相に繋がるものであるといえる。

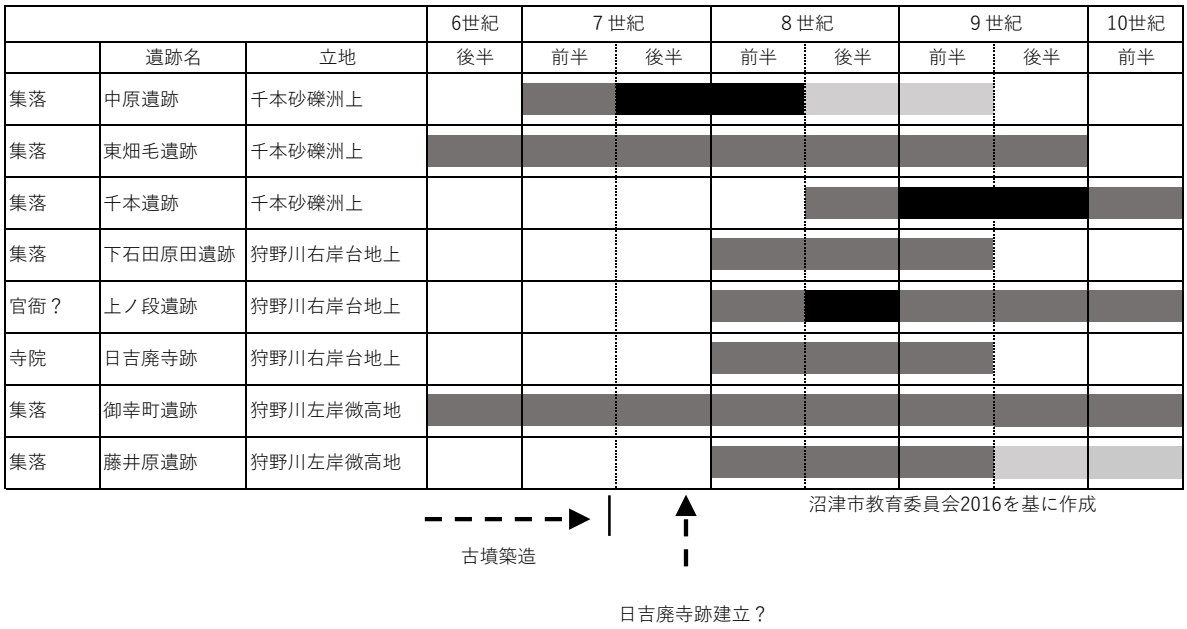


図 10　古代主要遺跡の消長図

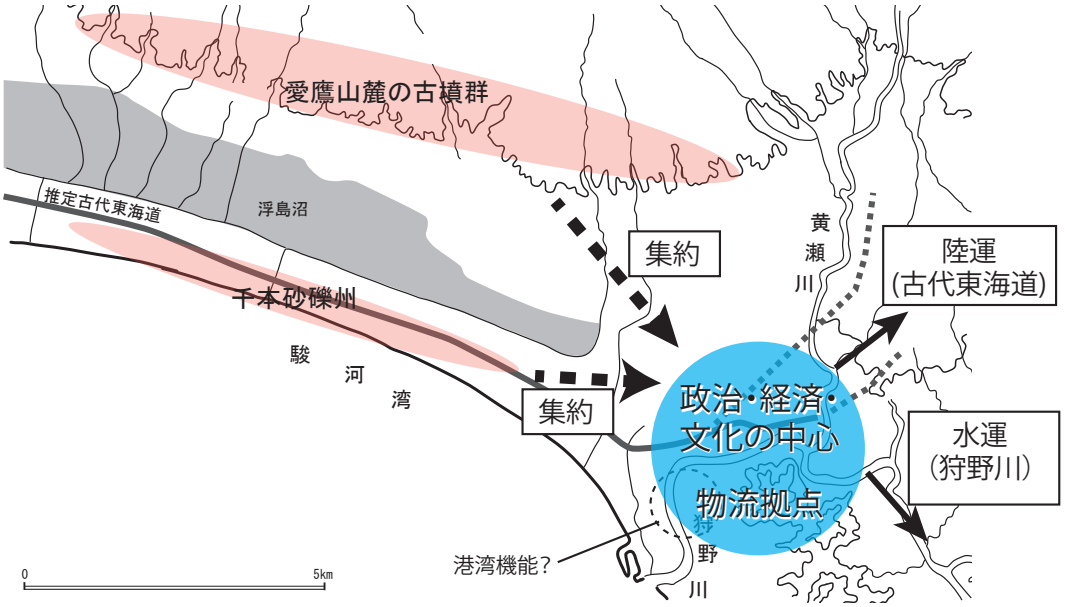


図 11　古代における中心地の変化に関する模式図

4　伊豆とのつながり

沼津市域における古代の遺跡の立地は前述のとおりである。しかしながら、官衙の可能性がある上ノ段遺跡や寺院である日吉廃寺跡のような遺跡がなぜ黄瀬川扇状地上に形成されたのであろうか。明確な根拠となるような遺跡や遺構、遺物は確認されていないものの、狩野川の河口域に位置していることが最大のポイントである。すなわち狩野川中・上流域との関わりである。

狩野川は伊豆半島を源として北上しながら流れ、黄瀬川との合流地点あたりで香貫山を北側から回り込むように大きく迂回して駿河湾に注いでいる。680 年に駿河国から伊豆国が分国されたことから、旧国単位では異なるものの、狩野川流域の三島市、函南町、伊豆の国市に所在する当該期の諸遺跡へ水路で物資が運搬される場合、狩野川がメインの水路であったことは想像に難くない。この一例として伊豆国の中心である三島市街地を流れる大場川・御殿川とは繋がっており、その流域には伊豆国の国庁推定地や伊豆国分寺、官衙関連遺跡とされる伊勢堰遺跡や人面墨書土器で有名な箱根田遺跡などが存在する。このことから、当地方に海路や陸路によってもたらされた物資は沼津の地に一度集積され、そこから狩野川を上る形で、船などで運搬する際の港（≒物流拠点）としての役割があったものと推測されよう。

ただし、現在のところいずれの地域においても明確な荷揚げを行うための遺構を有する遺跡は確認されていないが、狩野川の河口域には港が存在したことは間違いないであろう。

5　海浜部の遺跡は水産物の加工場か？

（1）堝形土器と水産物加工

奈良などの都から出土する木簡には、駿河や伊豆からの貢進物として堅魚煎汁（カツオイロリ）や煮堅魚、荒堅魚などの記述があることから、駿河や伊豆において堅魚を使用した水産加工品が作られていたと考えられている。この水産加工品を作るための土器として堝形土器の使用が想定されている。堝形土器は直径が 40cm を超えるような大型の鉢型を呈する土器で、沼津市では海浜部や狩野川河口域に存在する藤井原遺跡、御幸町遺跡、千本遺跡、下石田原田遺跡、中原遺跡といった集落遺跡において日常の道具である坏や甕などとともに出土している。このことから、これらの遺跡は水産物の加工品場であった可能性がある。

しかしながら木簡に残る堅魚加工品が堝形土器で作られていたとする記録は残っておらず、その実態は不明である。かつて沼津市歴史民俗資料館の学芸員であった瀬川裕市郎氏が、自身が発掘調査を担当した藤井原遺跡から出土した堝形土器の検討や奈良・平城京木簡の記述内容などを積極的に検討した。

瀬川氏以後、古代の堅魚製品についての研究はあまり行われていない。近年、東京医療保健大学の三舟隆之教授を中心とするグループが古代の堅魚製品にかかる学際的な研究を進めており、その一環で、現在、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の庄田慎矢氏の研究グループが沼津市及び富士市出土の堝形土器に残る残存脂質分析を実施しており、その結果が待たれる。

なお、堝形土器は住居址からの出土が大半であるが、堝形土器が出土する住居址と出土しない住居址が存在する。このことは堝形土器が専業的な使用をされていた可能性を示唆しており、今後住居址ごとに出土する土器の器種を確認し、堝形土器が出土する住居址での特徴を把握する必要がある。

(2) 壺Ｇについて

奈良・平城京木簡に記録が残る堅魚製品の中でも堅魚出汁を入れる容器として「壺G」と呼ばれる土器が使われていたとする意見がある。壺Ｇとは平城京から出土した土器の分類で壺のＧ類に分類された土器であり、考古学研究者は通称で「壺Ｇ」と呼んでいるもので、奈良時代後半から平安時代前半にかけて都や駿河・伊豆・関東・東北に分布・流通した須恵器であり、細長い体部に、太くて長い頸部を付す形態で、轆轤水挽き成形で作られているもの（小田 2023）である。なお壺Ｇについては上記のような容器としての役割のものとする説の他に、水筒や花瓶（仏具）ではないかとする意見もあり、いまだ定説はない。

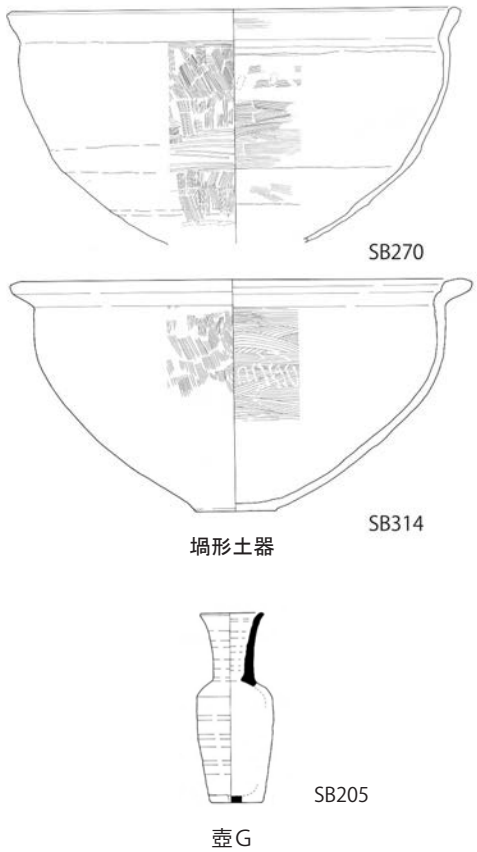


図 12　御幸町遺跡出土堝形土器と壺Ｇ（縮尺不同）

静岡県では藤枝市の助宗古窯址群や伊豆の国市の花坂古窯址群といった窯址で出土していることから、県内の古代の窯で作られた土器と考えられている。堝形土器と壺Ｇが伴って出土する事例は少ないものの、富士市の東平遺跡の住居址で共伴が確認されていることから、堝形土器を使用して作った堅魚の煮製品を入れる容器として壺Ｇが使用されたと考えられている。しかしながら藤井原遺跡、千本遺跡、下石田原田遺跡といった沼津市内の遺跡で壺Ｇが出土しているものの、出土事例は圧倒的に少なく、実際にどのように使用されたかは不明な点が多い。

駿河・伊豆での堅魚などの水産加工については、木簡による文献資料が存在することから、行われていたことは間違いない。しかしながら、それらを示す具体的な考古資料についてはまだまだ不明な点が多く、考古学的な知見のみではなく自然科学的な側面からなどの更なる検討が必要である。

おわりに

沼津市域において、古代では官衙推定遺跡（上ノ段遺跡）や寺院（日吉廃寺跡）などの政治・経済・文化の中心となる遺跡が狩野川右岸に設けられ、この一帯の周辺部に集落遺跡が分布する遺跡様相を呈することになる。これは、戦国期の三枚橋城跡や江戸時代の沼津城跡がこの一帯に存在したのと同じであり、前述したように現在の沼津の街の様相につながっていると言える。すなわち狩野川の河口部付近という地理的要因がその後の街・地域の発展に密接に結びついており、まさに「川」と沼津の密接な関係を示す良好な一事例といえるのである。

※報告書等の参考文献は割愛させていただいた。

事例報告 2

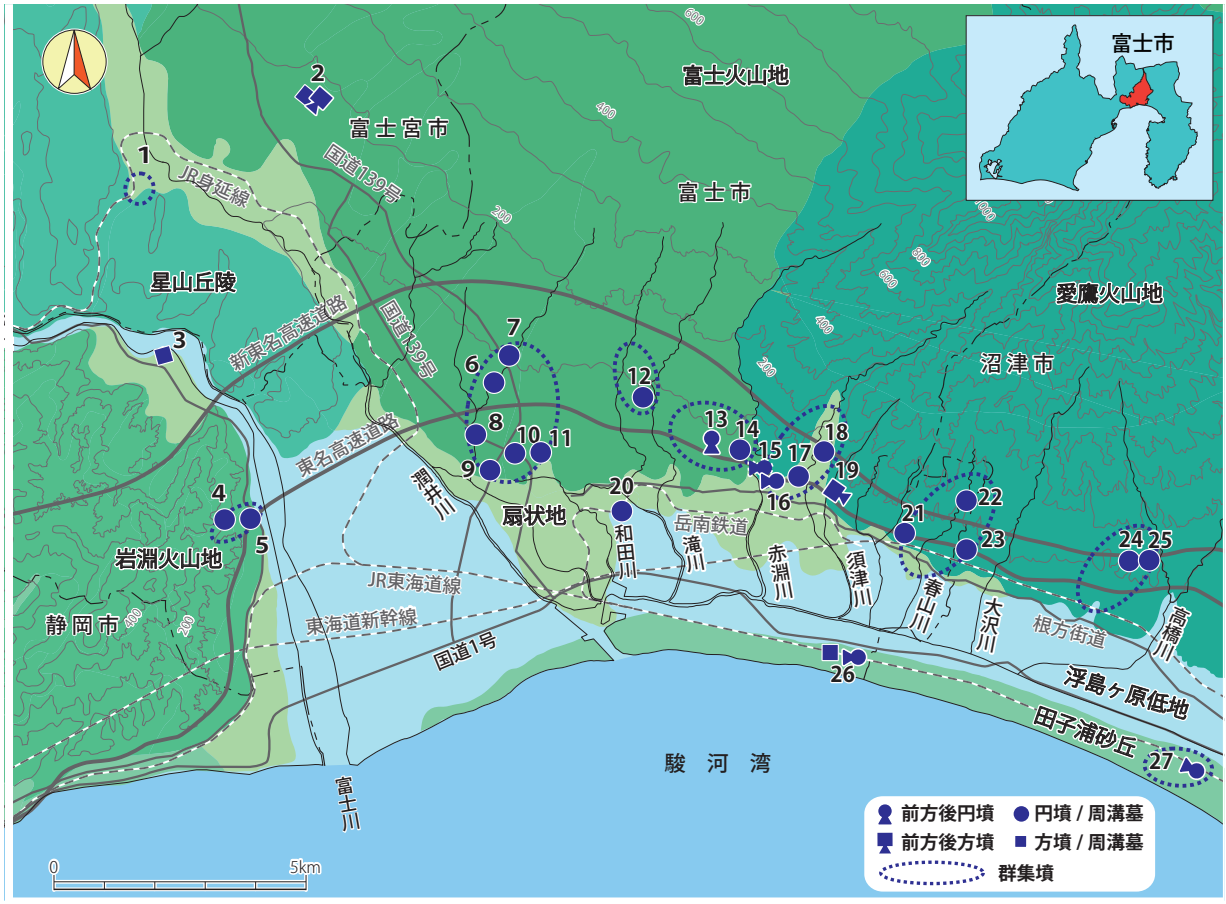
富士郡家の原風景と富士川

佐藤　祐樹
（富士市教育委員会）

はじめに

古代中国では「善く国を治める者は、必ずまず水を治める」と言われ、日本でも武田信玄による「信玄堤」を含めた富士川の流水のトータルコントロールシステムは現在もなお機能している。富士市においても延宝 2 年（1674）、中里村の古郡家 3 代による 50 余年をかけた「雁堤」の築堤工事により、富士川下流域は加島五千石といわれた新田地帯に開発され、現在の富士市発展の礎となったと評価される。また、徳川家康が京都の豪商である角倉了以に富士川の開削を命じたことは、甲斐の年貢米や豊富な物資を大量に江戸に運ばせるためであり、「川の道」の確立といえる。

古代の駿河国富士郡においても、富士川が果たした役割は大きく、流通を支える「道」として地域の発展にとって欠かせない存在であったと考えられている。そこで、本論では、古代富士郡の発展を支えた川の役割について紹介していくこととしたい。



1. 別所古墳群　2. 丸ヶ谷戸遺跡　3. 中野遺跡　4. 妙見古墳群　5. 山王古墳群　6. 中原 4 号墳　7. 横沢古墳　8. 西平 1 号墳　9. 伊勢塚古墳　10. 東平 1 号墳　11. 国久保古墳　12. 実円寺西 1 号墳　13. 東坂古墳　14. 富士岡 1 古墳群・花川戸 4 号墳　15. 寺屋敷古墳　16. 天神塚古墳　17. 琴平古墳･道東古墳　18. 須津 J-6 号墳・千人塚古墳　19. 浅間古墳　20. 沖田遺跡　21. 船津薬師塚古墳　22. 船津ふくべ塚古墳　23. 荒久城山古墳　24. 秋葉林 1 号墳　25. 的場 3 号墳　26. 庚申塚古墳･山の神古墳　27. 神明塚古墳・松長古墳群

図 1　富士・沼津市域の主要古墳

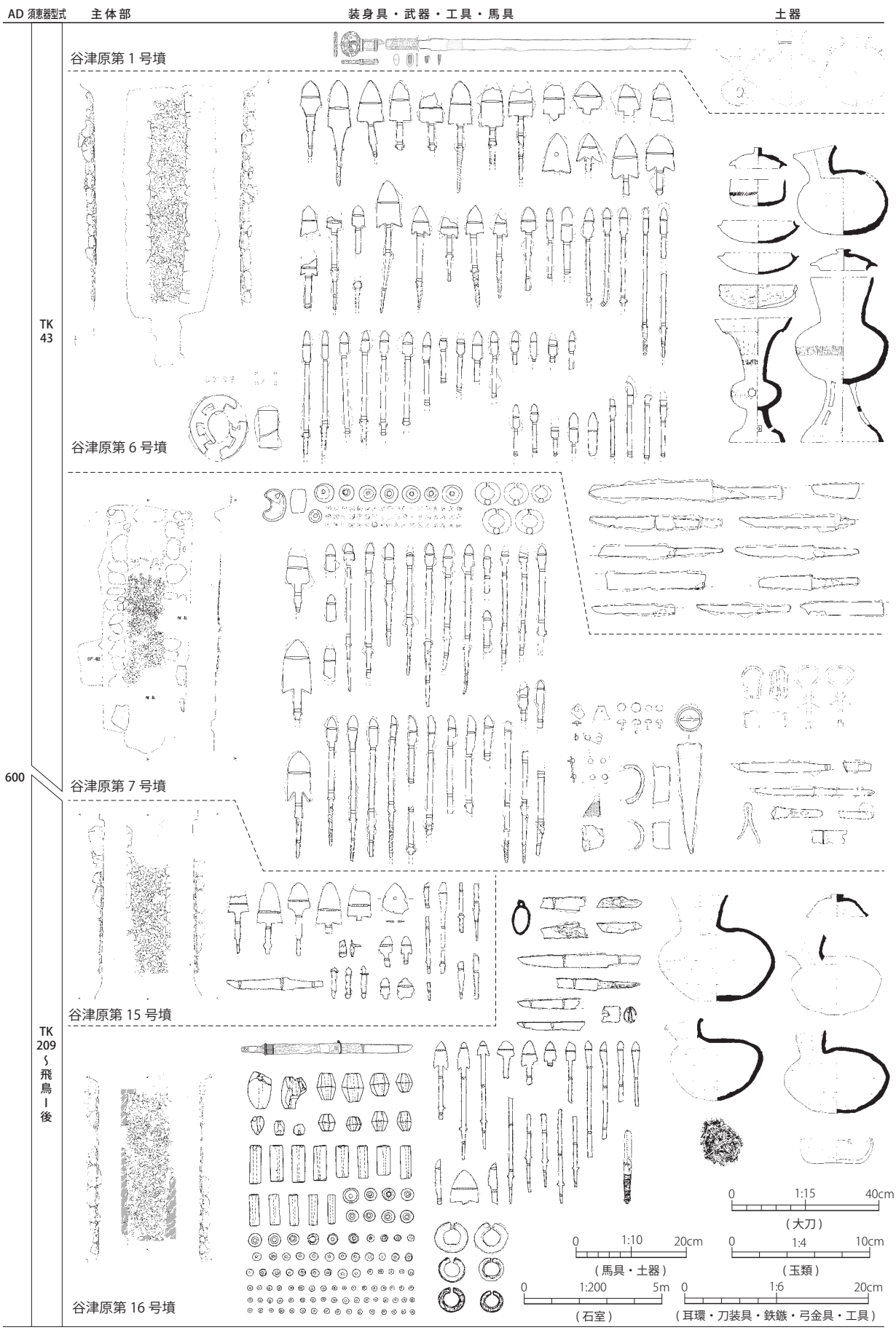


図 2　谷津原古墳群の造墓活動（1）

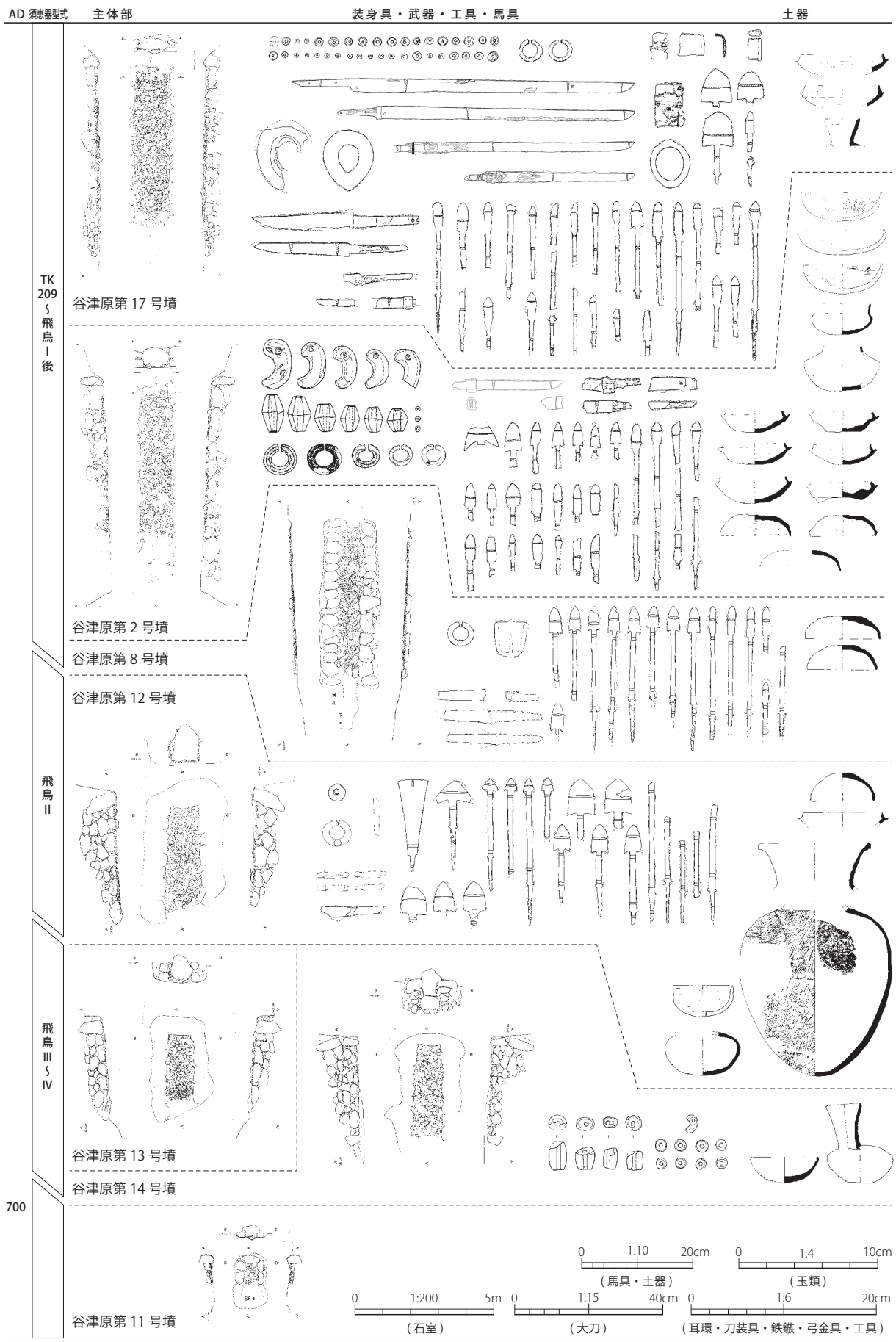


図 3　谷津原古墳群の造墓活動（2）

1　富士川西岸古墳群の胎動と富士川東岸の集落域

駿河湾から富士川を遡り甲斐に至るルートが道として機能し始めたのは、古く縄文時代の頃であったと考えられる。弥生時代後期には富士川を 10km 程度、遡った場所にある清水岩の上遺跡で菊川式土器の影響を受けた土器がまとまって出土しており、広く太平洋岸と甲斐を含めた中部高地との活発な地域間交流の存在を示している（佐藤 2015）。

富士川西岸古墳群の胎動　富士川の西岸には 200 基以上の古墳群が存在したと推定され、その大部分が富士川に注ぐ吉津川周辺の丘陵及び岩淵山塊の斜面に立地し、谷津原古墳群、室野坂古墳群、山王古墳群、妙見古墳群、小山古墳群が半径 200m の範囲に群集している（石川 2008）。谷津原古墳群では、6 世紀末の谷津原 1 号墳の築造（大谷 2022）から造墓活動が開始されて、7 世紀を最盛期として、石室規模を小型化しつつ 8 世紀に至るまで墓域が展開することが明らかとなっている。

富士川東岸の集落域　一方、7 世紀の集落域については、古墳群の展開する富士川西岸では明確には確認できず、造墓集団の拠点を富士川西岸域の古墳群周辺に求めることは困難である。その候補地として挙げられるのが、沢東 A 遺跡をはじめとした富士川東岸域の集落群である。

その当時、富士川下流の流路は、現在の河道より東寄りの田子ノ浦港方向に向かい多くの派川を持って駿河湾に流入し、広大な富士川扇状地を形成していたと考えられている。富士川西岸古墳群と沢東 A 遺跡はこの富士川扇状地を挟んで立地する位置関係にあたる。沢東 A 遺跡は古墳時代中期の 5 世紀後半に出現し、倭王権の東国支配の一端を示す新たなカミマツリである石製模造品を使用した水辺祭祀の存在が確認され、潤井川を含めた治水に対して新たな灌漑技術を備えた渡来人を含む先進技術者集団の居住エリアと考えられている。6 世紀後半に作られた伝法古墳群内の中原 4 号墳の被葬者もこのエリア

図 4　古代富士郡家周辺の景観（8 世紀）

を主な活動拠点として活躍していたと想定され、集落としての最盛期を迎える7世紀には、富士市域でも随一の規模を有する大集落として発展している。

愛鷹山に造られた1000基以上の古墳の造墓集団の拠点に浮島ヶ原低地を挟んだ田子ノ浦砂丘上の集落に求めるのと同じように、富士川西岸古墳群の造墓集団の拠点に富士川扇状地を挟んだ沢東A遺跡周辺に求めることもできるだろう。

図5　中原第4号墳出土品

2　富士郡家の成立と伝法古墳群・富士川西岸古墳群の連動

富士郡家の成立　奈良時代になり、沢東A遺跡の集落規模が一気に縮小するのに対応するようにして、現在の富士市役所の北側一体にひろがる東平遺跡（富士郡家）が急成長をみせる。郡家設置以前の評家については明確ではないが、仮に設置されているとしたら、前述の沢東A遺跡が有力な候補地と言える。東平遺跡は富士郡家の比定地とされている

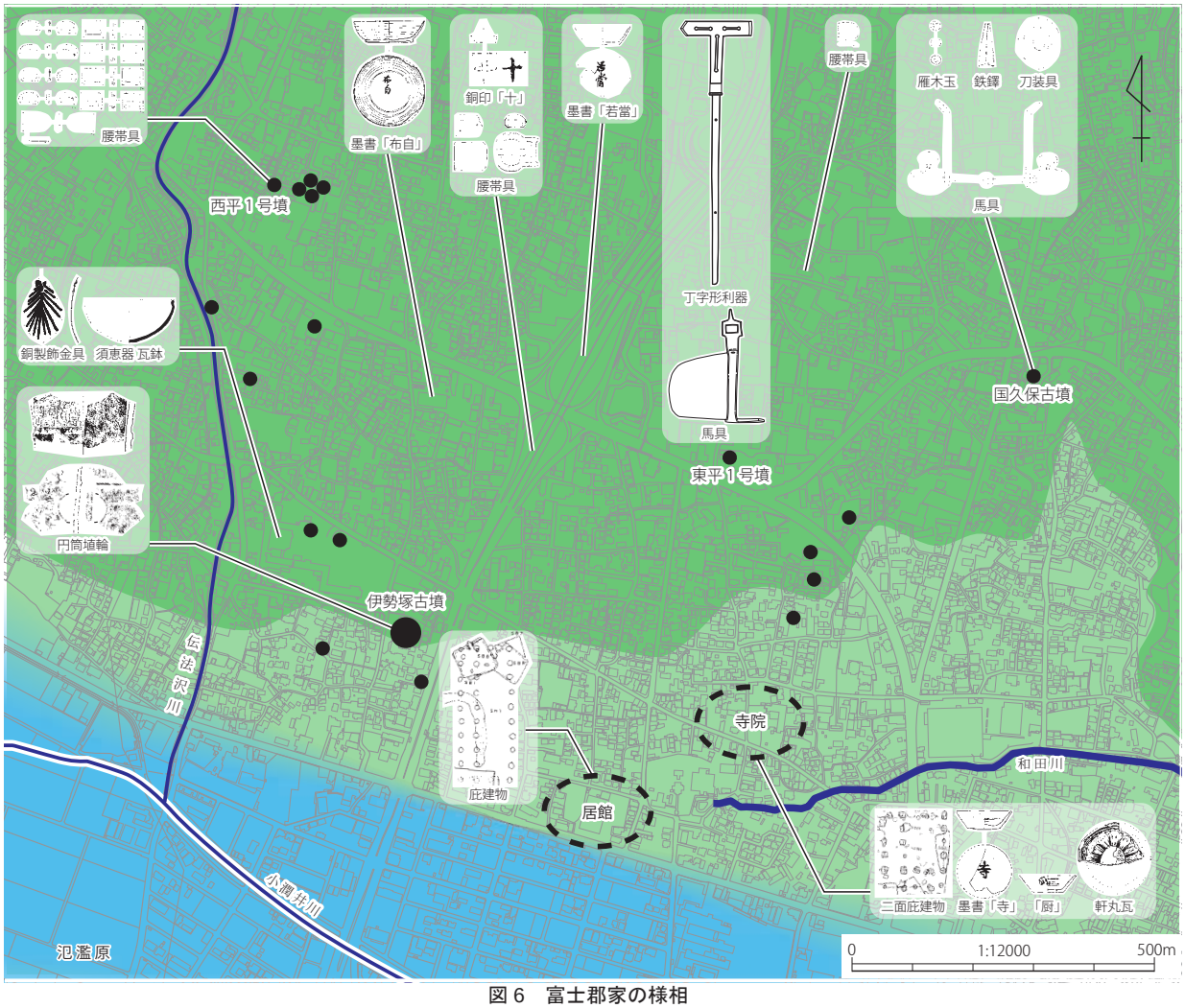


図6　富士郡家の様相

ものの、発掘調査において郡司が政務にあたる政庁や正税出挙保管の正倉、宿泊用の舘などの構造は明確になっていない。しかし、整然と並ぶ倉庫群の存在や墨書「布自」の出土など様々な調査成果から東平遺跡一帯を富士郡家と考えることは学界の共通認識になってきているといえる。特に、郡家成立以前の 6 世紀後半から 7 世紀にかけて展開する伝法古墳群の存在から想定される有力層の形成とその墓域周辺の東平遺跡が 8 世紀に発展するということ、また古代東海道を含む交通の要衝に位置し、富士川扇状地の最も東側に位置する和田川の湧水地付近にあたることなどの地理的状況も東平遺跡を富士郡家と考える根拠となっている。

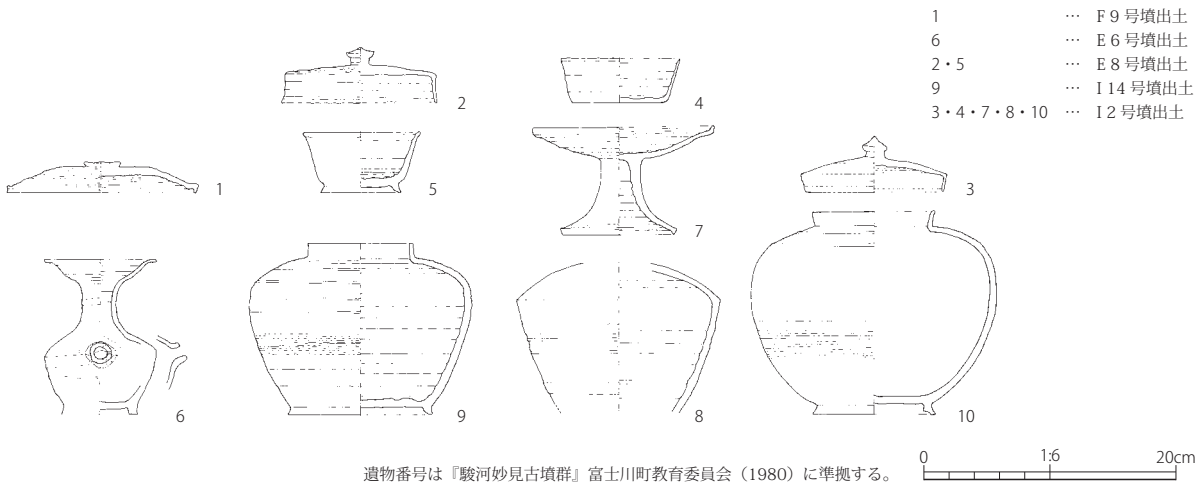
また、東平遺跡に隣接して三日市廃寺跡とされる古代寺院が存在する。明確な寺域や構造は明らかとなっていないが、石川寺式の影響を受けた丸瓦などが出土している。なお、この瓦は小田原市千代廃寺出土瓦の文様構成の一部と共通していることから、足上郡からさわ瓦窯の工人が技術供与をして三日市廃寺の瓦を生産したと考えられており、7 世紀における在地首長間の郡域を超えたネットワークの存在が指摘されている（田尾 2011）。

伝法古墳群の連動　東平遺跡の西側エリア内には石室規模が明らかに小さい古墳が点在している。その中の一つに西平第 1 号墳が存在する。石室の発掘調査が部分的に行われているに過ぎないが、方頭大刀や蕨手刀に加えて、銅製の腰帯具が出土している。それらの副葬品から被葬者は富士郡家大領級であると想定される。8 世紀に展開する郡家周辺に 6 世紀後半以降場所を変えながらも古墳が造られ続けていたことを示している。

富士川西岸古墳群の連動　富士郡家周辺で西平第 1 号墳を含む小石室墳が造られている頃、富士川西岸古墳群でも 6 世紀後半以降の造墓活動が谷津原古墳群を含む各古墳群で継続されていることが分かっている。特に妙見古墳群ではその大部分が 7 世紀末から 8 世紀のものと推定され、I2 号墳や I14 号墳からは火葬骨を収める蔵骨器に使用されたと考えられる有蓋短頸壺が出土していることから、火葬という新たな葬送概念を取り入れた富士郡家の官人の墓であると考えることができる。

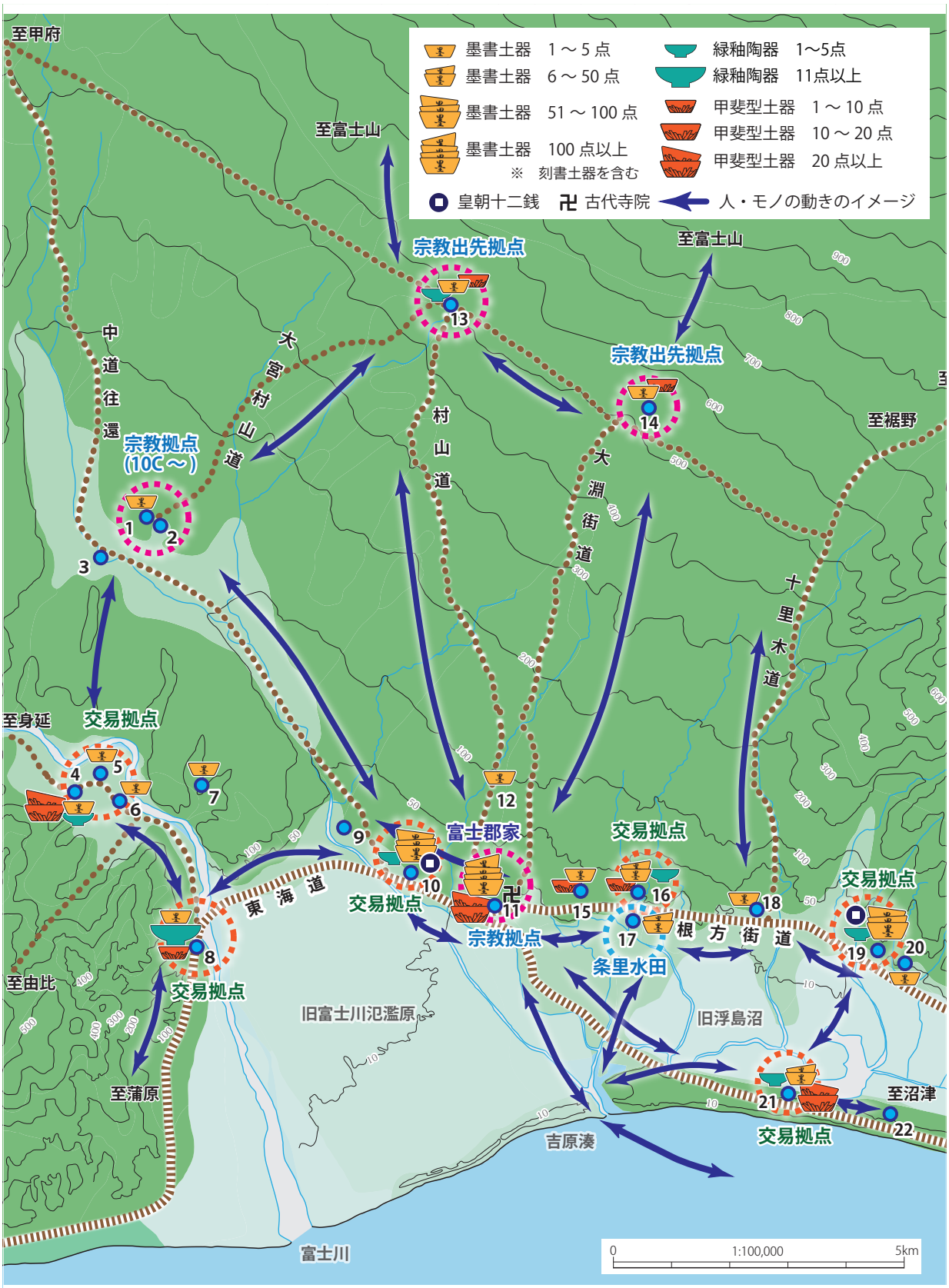
富士郡家と構造的集落　郡域における政治的、経済的、宗教的中心地が郡家であり、それが東平遺跡周辺であることはすでに述べたとおりである。郡家の役割は様々であり、これまで「官衙関連遺跡」として理解されてきたような複数の集落と有機的関係を有していたと考えることが出来る。例えば、富士郡家を中心に広がる街道や境界の管理を行うことや、荷揚げ場やそれらを一時的に管理する管財的要素を持つ集落、または、それらの監視を担う集落など様々な性格を有する集落を有機的・構造的に結びつける中心的役割を担っていたのが 6 世紀以降に成長した在地首長層であり、富士郡家の郡司層の姿であったと考えられる。

具体的に境界を管理する遺跡としては天間代山遺跡があげられる。天間代山遺跡は県道 414 号線（大月線）付近の丘陵上に位置する遺跡で富士郡家からは 4km ほど離れている。限られた調査ではあるも



遺物番号は『駿河妙見古墳群』富士川町教育委員会（1980）に準拠する。

図 7　妙見古墳群出土須恵器



1. 浅間大社遺跡　2. 大宮城跡　3. 泉遺跡　4. 浅間林遺跡　5. 中野遺跡　6. 中野石切場遺跡　7. 初田遺跡
8. 破魔射場遺跡　9. 沢東 A 遺跡　10. 中桁・中ノ坪遺跡　11. 東平遺跡　12. 横沢古墳　13. 村山浅間神社遺跡
14. 岩倉 B 遺跡　15. 舟久保遺跡　16. 沖田遺跡　17. 宇東川遺跡　18. 祢宜ノ前遺跡　19. 宮添遺跡
20. コーカン畑遺跡　21. 三新田遺跡　22. 柏原遺跡

図 8　古代富士郡家周辺の景観（9 ～ 10 世紀）

のの奈良時代から平安時代にかけての建物跡から墨書土器や転用硯などが出土しており、物資の往来などを監視し、富士郡家の玄関口を管理するような性格を持ち合わせていたと想定できる。

また、富士川西岸古墳群の周辺では7世紀には明確な集落が展開しなかったにもかかわらず、8世紀に入り小規模ながら、古墳群に隣接した破魔射場遺跡が展開することは、古墳の造営母体としての位置づけよりも富士郡家の実施する境界管理という役割を担っていた可能性も想定されよう。

3　富士川河口周辺に展開する古代物流ターミナル

富士川河口西岸の物流拠点　富士川を介した甲斐との物流が本格化するのは9世紀後半になってからである。現在の富士川サービスエリア建設時に発掘調査された破魔射場遺跡や県道10号線沿いに展開する浅間林遺跡からは甲斐で作られた甕や坏がまとまって出土しているほか、東海道や海路をつかって西方から運ばれた灰釉陶器や緑釉陶器なども多く出土している。富士川河口西岸に展開する破魔射場遺跡には多方面から運ばれる様々な文物が集まり、ここを経由して行き先を振り分けるような性格を有する物流拠点であったと位置づけることができよう。

田子ノ浦砂丘上に位置する交易拠点　富士マリンプールの東側の田子ノ浦砂丘上に存在する三新田遺跡でも、9世紀頃の甲斐との交流を示す土器が多く出土している。また、「三枝」の墨書がある土器も注目される。三枝とは甲斐国山梨郡に本拠地を置いた三枝氏との関連を想定することができ、甲斐との頻繁な交流を見ることができる。遺跡はラグーンである浮島ヶ原に面し、後の東海道や吉原湊に面していることからも交通の要衝として、他地域からのモノや人を迎える交易拠点としての性格を有していたと考えられる。

おわりに

富士郡家と周辺に展開する遺跡に対して、富士川を使った交易という側面から評価をしてきた。川は現在でも市域を分ける際の境界としての位置づけがなされるが、それと同時に「道」としての位置づけができることが明らかである。また、これまで触れてきた遺跡が、現在でも幹線道路沿いに位置しているということは、都市の発展にとって道の果たした役割が大きかったということを示している。富士郡家は、富士川や和田川、太平洋沿岸の水上交通と東海道駅路などの複数の道の結節点である要衝であり、それまでの在地首長層の成長した本拠地である事が占地の決定的要因であると結論付けられる。

参考文献

石川 武男　2008「富士川西岸域古墳群の様相」『谷津原古墳群 平成16・17年　第4・5時調査報告書』富士川町教育委員会

大谷 晃二　2022「谷津原1号墳の単竜環頭大刀」『富士市内遺跡発掘調査報告書　令和2年度』富士市教育委員会

佐藤 祐樹　2015「清水岩の上遺跡出土の弥生土器」『富士市内遺跡発掘調査報告書―平成24・25年度―』

田尾 誠敏　2011「師長国造領の分割と地域拠点の成立―考古学からみた在地支配と首長層の動向―」『小田原市郷土文化館研究報告』No.47

藤村　翔　2019「富士山・愛鷹山南麓の古墳群の形成と地域社会の展開」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊30

図1・4・8は藤村氏作成の富士山かぐや姫ミュージアム展示パネルを一部修正